

—巻頭エッセイ—

## 地質ニュースの専門性について考える

### —ナショナルジオグラフィックとの出会い—

石原舜三<sup>1)</sup>

1960年代にアメリカ合衆国に留学した日本人学生は、ナショナルジオグラフィックの素晴らしいカラー写真と解説記事に魅了され、購読者となったに違いない。世界から集められた得難い自然の写真がふんだんに盛り込まれ、我々に自然の巧みさと自然から学ぶものを数多く与えてくれた。

当時は、また、世界旅行をすることなど、夢のまた夢であった。出国時の持ち出し金額制限が200米ドル(72,000円)であったから、経済的に可能な人でも合法的には世界旅行は不可能であった。当時の国家公務員の初任給は1万円程度に過ぎず、世界旅行は庶民にとってまさに高嶺の花であった。200米ドルの制限が撤廃されたのは1964年3月末である。その年の9月に東京でオリンピックが開催された。安価に“世界旅行”が出来る点もナショナルジオグラフィックの魅力であった。この雑誌には今では日本語版も出版されているが、大きさ(B5版)、綴じ方(今では珍しい“あじろ綴じ”)共に昔ながらの伝統を守っている。

地質ニュースは1953年の創刊である。最初はわずかに8ページの年間6号の発行であり、月刊誌に拡充されたのは1965年である(広山, 1996, 本誌500号参照)。以来今日に至るまで、520号が出版されているわけであるが、この間に地質調査所の事業や研究業務の紹介から出発して教材や解説を加え、地球科学に関する総合情報誌に成長してきた。今や地球科学で職を持つ人および地球科学をこれから学ぼうとする人に必読の雑誌となっている。

一方、国立研究所である地質調査所が国民の税金で得た成果を社会に還元する視点から見ると、成果が一般社会に十分に伝達されていない指摘

が、“外部評価委員会”によってなされている(佐藤, 1996, 本誌500号参照)。地質ニュースがこの点について広報活動的な役割を果たすことは勿論であるが、それと同時にオールジャパンの立場から、サイエンスとしての地球科学の啓蒙活動を読者へ行うことも重要である。

地質ニュースの読者の多くは恐らく地球科学を一度は学んだことがある人達であろう。その様な読者は地球科学全体として、今何が起きているかを知りたいのでは無かろうか。“これを読めば時代遅れにならない”と言ったものを適宜望んでいるであろう。それに応えるために、最新の概念や新しい分野の研究を紹介し、解説する記事を作ることを、広く全国的に適任執筆者を求めて企画して欲しいものだ。

一方、専門の地学教育を受けていない“アマ”の読者に対する啓蒙活動も、理科離れが進んでいる今日、特に重要だ。ナショナルジオグラフィックの様に多くの写真によって素材を提出し、先ず読者の目を引きつける。そこから読者は自然現象、特に地質現象に関心を持ち、ついで謎を解読する興味を持つであろう。一般の人々が机上の地質ニュースを偶然手にした時、引き寄せられるように“見る”あるいは“読む”写真や記事があることは地球科学の普及と啓蒙に非常に重要である。

地質ニュースの記事の専門性について、私はこのように幅広く考えている。“プロ”には“科学”と“実用”面で役立つ情報を、“アマ”には好奇心を掻き立てる記事を供給する、“プロ”にとっても“アマ”にとっても“すーと”手が出る、魅力的な地質ニュースとなって欲しいのが私の願いである。

1) 地質調査所 顧問